
雪の降る街

かりねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の降る街

【Nコード】

N1184G

【作者名】

かりねこ

【あらすじ】

終わりはいつも突然やってくる。「あの日」、世界は変わってしまった。二人はその世界の終わりを迎えようとしていた。全てが水に囲まれた空間で、最期の時が二人に与えたものとはなんだったのか。

雪の降る街

艦内にペンを走らせる音が響く。全てが水に囲まれた世界で、その音はより際立って聞こえた。紙一枚を隔ててペンの金属板を叩く音がある他は、無機質な機械音があるだけだった。

その機械音は明らかに本来のそれではなく、この艦に残された時間があとわずかであることを告げていた。

書き終えて、ペンを置く。大きく息を吐いてから、字を書き込んだ紙を見て一人つぶやいた。

「手紙、……か」

思い返せば、手紙を書くなんて随分と久しぶりな気がした。

手紙とは普通、誰かに宛てて書くものだ。その誰かがいなくなれば、手紙を書く機会は当然無くなる。

ただ、今回の手紙は、普通のそれとは少し意味合いが違っていた。誰かに宛てて書くものであることに変わりはないが……。

今、僕が手にしている、やや豪華な紙。この紙に何かを書くということ。それは、その手紙を宛てた相手に二度と会えないことを意味していた。手紙、というよりも遺書だった。

「どうだ、書けたか？」

不意に背中の方から声がした。振り返ると、艦長が僕の座っている椅子のほうへと歩いて来ていた。

「ええ、今書き終えたところです」

もと紙が入れてあった円筒の中に再び紙を入れ、蓋をしっかりと閉める。金属特有の冷たい感触が伝わってきた。彫りもほとんど無い、そのシンプルなつくりの円筒は、鈍い銀色の光を放っている。

「そうか」

髭の奥に隠れた口の端を少しだけ上げて、艦長は僕の隣の椅子に

腰を下ろした。

艦長の手には、グラスが二つかぶせてある酒瓶と、今僕が持っているのと同じ、銀の円筒が握られている。

「しかし、ツイてないな」

艦長のその言葉に僕は黙って頷く。

本当に僕たちは運が悪かった。

海底に沈んだ街を探索し、帰る途中だった。崩れてきた瓦礫が潜水艦を直撃。僕たちの艦は完全に動くことができなくなった。

今、この艦を支えているわずかな電力も、あと少しで無くなるうとしている。

「まあ、二人で酒でも飲もう。ほら」

艦長はそう言っつて、グラスを僕に差し出す。一瞬、こんなときに酒なんて、という考えがよぎったが、こんなときだからなのかもしれないと思ひ返し、グラスに手を伸ばす。

「どうも」

グラスを両手で受け取ると、そこに透明の液体が注がれる。酒瓶を受け取り、今度は僕が艦長のグラスを満たしていく。

「ありがとう」

そう言っつて笑った艦長の顔から、どこか懐かしさのようなものを感じる。

「じゃあ」

「はい」

その言葉を交わし、二人とも一気にグラスを空けた。

「ははっ。いい飲みっぷりじゃないか」

艦長は楽しそうにそう言っつと、二杯目を注いでくれた。僕もお返しに二杯目を注ぐ。

最後の手紙、最後の酒。すべてが最後の行為になっていく。そう思っつても、死ぬことに対しての実感は無かった。何故だかは分からなかった。ただ、ひどく落ち着いた気分だった。

ふと、隣でグラスに目を落としている艦長を見る。

この人は今、死を控えてどんなことを思っているのだろうか？ふと、そんな考えが頭に浮かぶ。

「まさか、死ぬのがここになるうとはな」

「え？」

艦長から洩れたその言葉に虚をつかれる。

「ここはな、私が生まれた場所なんだよ」

艦長は手にしているグラスを一気に煽った。それから僕の目をまっすぐに見据えて、

「そして、お前が生まれた場所でもある」

言った。

「え？」

……今、何て言った？僕の生まれた場所？

「やはり覚えてない、か……。まあ、無理も無い。あんなことがあつてはな」

艦長から発せられる言葉に頭が追いついてくれない。

ここが僕の生まれた場所。その事実には戸惑ったが、理解した。

もともと記憶に残っていない事だ。衝撃を受けたのはそこではない。僕が驚いた原因の九割以上を占めていたのは、なぜ僕の知らないことを、艦長が知っているのかということだった。

数秒の昏迷。そして、やがて一つの答えが僕の頭の中に浮かぶ。まさか、

「父さん……？」

答えがそのまま口から出る。それは、かなり確信に近いものだった。

艦長は微笑を浮かべ、再び空いた自分のグラスを満たしていく。それが答えになった。

「最期に二人で酒が飲めてよかったよ」

艦長が、父さん。まだはつきりと実感が湧いてこない。

何から口に出せばいいのか分からずにいると、一息をつく音が聞こえ、その後言葉が続けられる。

「あの日、世界は変わってしまった。私たちを引き離したのもあの日の出来事だ」

あの日。それは、歴史の教科書に載るとか、そういったレベルのことではなかった。「あの日」は文字通り世界を変えてしまった。

十八年前の二月四日、地球に巨大な彗星が飛来した。地球に住む人々は激突前に破壊を試みたが、全てを破壊することはできず、彗星の一部は当時の南極大陸へと落ちた。その時の衝撃で、南極の氷の大部分が融解。地球の海面は一気に上昇し、結果、多くの陸地と、生物が洗い流された。

艦長が、……いや、父さんが再び窓の外へと目を向ける。

「美しい街だったよ。それに、雪がよく降る街でな。アイツもこの街が好きだった」

父さんが寂しそうに呟く。僕もつられて父さんと同じ方へと目を向ける。

瓦礫に成り果てた過去の建造物と、その全てを飲み込もうとしているかのように暗い水が広がっている。そこにかつて存在していたであろう美しい街の景色は、もう見る事ができなかった。僕たちの潜水艦から漏れる光が無ければ、この世界を照らすものは何も無い。

一瞬、セピア色がかつた雪の景色が脳裏に浮かぶ。

そうか……。僕は、ここで……。

言葉にならない想いがこみ上げてきた。

不意に、窓の外を何かが横切る。いや、「何か」ではなかった。

錯覚か？

グラスを置いて椅子から立ち上がり、窓の方へと足を進める。目の前に窓の外の、向こう側の世界が広がった瞬間、僕は息をするのを忘れた。

雪だ。

目の前の光景と、自分の中にある深い記憶が結び付き、その名を

認識する。窓の形に切り取られたその世界には、確かに雪が降っていた。

白く舞い散るそれは、僕たちの潜水艦から漏れる光を受け、瓦礫に包まれた世界を照らしていた。それは、この世のものとは思えないほどに神秘的な光景だった。

「マリンスノーだ……」

初めて耳にする言葉を背中受けて、振り返る。父さんも食い入るような目でこちらを見ていた。普段の落ち着いた雰囲気からは想像できないほど驚いているようだった。

「海中に存在する微生物などが漂い、白く……雪が降っているように見える現象だ。私も、初めて見る……」

「マリンスノー……」

そう呟き、もう一度窓の外の景色へと目を向ける。まるで、昔のこの街の風景が蘇っているかのようだった。

「すごい……。本当に、綺麗だ」

思ったことがそのまま口から出る。そんなありきたりの言葉でしか形容できないのが悔しいほどに、その景色は圧巻だった。

「まさか、死ぬ間際にこんなものが見られるとはな」

父さんが言葉を絞り出す。そして、小さな声で呟いた。

「サヤ……、お前が、見せてくれたのか？」

艦内に響く機会音が弱まってきたのを感じる。残された時間が、尽きようとしていた。

「これで、思い残すことは何も無い」

最期に、願いが叶った。窓の外に目を向けたまま、父さんはそう付け加えた。

僕も父さんと同じ事を考えていた。

僕たちは艦内の明かりが消えるまで、見続けていた。

雪に照らされた、僕たちの街を。

「父さん……。最期に、会えてよかった」

田筒の、手紙を入れた方とは反対側の口から薬を取り出して、僕はそう告げた。

「私も、最期に二人である雪を見ることができて、本当に嬉しかった」

同じく薬を手にした父さんの顔が、ランプの灯りに照らされる。とても晴れ晴れとした顔をしていた。おそらく、僕も同じような顔をしていたと思う。

二人同時に薬を口の中へ放り込み、そして、飲みこんだ。

意識が朦朧としてきた。もう目には何も映らない。

遠のいていく意識の片隅で、父さんの声を聞いた。

向こうの世界に行ったら、また三人で、楽しくやろう……。

うん。

また、雪を、見よう……。

うん……。

ありがとう、父さん。

手に握った田筒の縁をそっとなぞった。それが最期になった。

(後書き)

まず、この小説を読んでいただいたこと、深く感謝します。

私の書いた小説を読んで、何かを感じていただければ、これほど嬉しいことはありません。

将来小説家を目指し、勉強中です。何かアドバイスなどいただけましたら、大変嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1184g/>

雪の降る街

2010年10月16日06時53分発行